

紫紺染について

宮沢賢治

青空文庫

もりおか 盛岡の産物さんぶつのなかに、紫紺染しこんぞめというものがあります。

これは、紫紺むらという桔梗ききようによく似た草にの根ねを、灰はいで煮出にだして染そめるのです。

南部なんぶの紫紺染むらは、昔むかしは大へん名高いものだったそうですが、明治いじになってからは、西洋せいようからやすいアニリン色素しきんそがどんどんはいつて来いましたので、一向いっこうはやらなくなつてしまいました。それが、ごくちかごろ、またさわぎ出いされました。けれどもなになん、しばらくすたれていたものですから、製法せいほうも染方そめかたも一向いっこうわかりませんでした。そこで県工業会けんこうぎようかいの役員やくいんたちや、工芸こうげ学校の先生は、それについていろいろしらべました。そして

とうとう、すっかり昔のようないいものが出来るようになって、東京大博覧会だいはくらんかいへも出ましたし、二等賞にとうしょうも取りました。ここまでは、大てい誰だれでも知っています。新聞にも毎日出ていました。ところが仲々なかなか、お役人方やくにんがたの苦心くしんは、新聞に出ていくくらいのもものではありませんでした。その研究けんきゆうちゆう中の一つのはなしです。

工芸学校こうげいの先生は、まず昔むかしの古い記録きろくに眼めをつけたのでした。そして図書館としよかんの二階かいで、毎日黄いろに古びた写本しゃほんをしらべているうちに、遂ついにこういういいことを見附みつけました。

「一、山男やまおとこ紫紺しんこんを売うりて酒さけを買い候事そうるさど、

山男やまおとこ、西根山にしねやまにて紫紺の根ねを掘ほり取り、夕景ゆうけいに至いたりて、ひそ

かに御城下（盛岡）へ立ち出で候上、材木町生薬商
 人近江屋源八に一俵二十五文にて売り候。それより山男、
 さかやはんのすけかた酒屋半之助方へ参り、五合入程の瓢箪を差出し、この中
 に清酒一斗お入れなされたくと申し候。半之助方小僧、身ぶる
 えしつ、酒一斗はとても入り兼ね候と返答致し候処、山男、
 まずは入れなさるべく候と押し申し候。半之助も顔色青ざめ委
 細承知と早口に申し候。扱、小僧ますをとりにて酒を入れ候に、
 酒は事もなく入り、遂に正味一斗と相成り候。山男大に笑いて
 二十五文を置き、瓢箪をさげて立ち去り候趣、材木町総代より
 おとど御届け有之候。」

これを読んだとき、工芸学校の先生は、机を叩いて斯うひとり

ごことを言いました。

「なるほど、紫紺しこんの職しよくにん人はみな死しんでしまった。生薬屋のおやじも死しんだと。そうしてみるとさしあたり、紫紺しこんについての先せ輩んぱいは、今では山男だけというわけだ。よしよし、一つ山男を呼よび出して、聞いてみよう。」

そこで工芸こうげい学校の先生は、町の紫紺染しこんぞめけん研究きゆうかい会かいの人ひと達たちと相談そうだんして、九月六日の午後六時ごごから、内丸うちまる西洋軒せいようけんで山男の招待しょうたい会かいをすることにきめました。そこで工芸学校の先生は、山男へ宛あてて上じようず手て紙しを書きました。山男がその手紙さえ見れば、きつともう出掛でかけて来るようにうまく書いたのです。そして桃ももいろの封筒ふうとうへ入れて、岩手郡いわたぐん西根山にしねやま、山男殿どのと上書きを

して、三銭せんの切手をはって、スポンと郵便函ゆうびんぼこへ投げ込みました。「ふん。こうさえしてしまえば、あとはむこうへ届とどこうが届くまいが、郵便屋ゆうびんやの責任せきにんだ。」と先生はつぶやきました。

あつはつは。みなさん。とうとう九月六日になりました。夕方、紫紺染むらさきくろぞめに熱ねつしん心な人たちが、みんなで二十四人、内丸西洋軒うちまるせいやげんに集あつまりました。

もう食しょく堂どうのしたくはすっかり出来て、扇風機せんぷうきはぶうぶうまわり、白いテーブル掛けかは波なみをたてます。テーブルの上には、緑みどりや黒くろの植木うえきの鉢はちが立派りっぱにならび、極ごく上じょう等とうのパンやバターももう置おかれました。台だい所どころの方からは、いい匂においがぶんぶんします。みんなは、蚕種取締所さんしゅとりしまりじよせつち設置せつちの運動うんどうのことやなにか、

いろいろ話し合いましたが、こころの中では誰もみんな、山男がほんとうにやって来るかどうかを、大へん心配していました。もし山男が来なかつたら、仕方ないからみんなの懇親会ということにしようと、めいめい考えていました。

ところが山男が、とうとうやって来ました。丁度、六時十五分前に一台の人力車がすうつと西洋軒の玄関にとまりました。みんなはそれ来たつと玄関にいらんでむかえました。俵屋はまるでまっかになつて汗をたらしゆげをほうほうあげながら膝かけを取りました。するとゆつくりと俵から降りて来たのは黄金色目玉あかつらの西根山の山男でした。せなかに大きな桔梗の紋のついた夜具をのつしりと着込んで鼠色の袋のような袴

をどふつとはいておりました。そして大きな青い縞しまの財布さいふを出して、

「くるまちゃんはいくら。」とききました。

俵屋はもう疲つかれてよろよろ倒たおれそうになっていましたがやつとのことで斯こう云いいました。

「旦那だんなさん。百八十両りやうやつて下さい。俵はもうみしみし云いつていますし私はこれから病びょういん院いんへはいります。」

すると山男は、

「うんもつともだ。さあこれだけやろう。つりは酒さか代だいだ。」と云いいながらいくらかわけのわからない大きな札さつを一枚まい出してすたすた玄関げんかんにのぼりました。みんなははあつとおじぎをしました。

山男もしずかにおじぎを返しながら、

「いやこんにちは。お招きにあずかりまして大へん恐縮です

。」と云いました。みんなは山男があんまり紳士風で立派なの

ですっかり愕おどろいてしまいました。ただひとりその中に町はずれ

の本屋ほんやの主しゅじん人が居いましたが山男の無暗むやみにしか爪つめらしいのを見て

思わずにやりとしました。それは昨日きのうの夕方顔のまっかな蓑みのを着き

た大きな男が来て「知つて置くおべき日にちじょう常じょうの作法さほう。」という本

を買つて行つたのでした。山男がその男にそっくりだったのです。

とにかくみんなは山男をすぐ食しょくどう堂どうに案内あんないしました。そし

て一いっしょ緒しょにこしかけました。山男が腰こしかけた時椅子いすはがりがりつ

と鳴りました。山男は腰かけるとこんどは黄金色きんいろの目玉めだまを据すえて

じつとパンや塩しおやバターを見つめ「以下原稿一枚？なし」

どうしてかと云うともし山男が洋行ようこうしたとするとやつぱり船に
乗らなければならぬ、山男が船に乗って上シャンハイ海ハイに寄よつたりす
るのはあんまりおかしいと会長さんは考えたのでした。

さてだんだん食しょくじ事すが進すすんではなしもはずみました。

「いやじつさいあの辺へんはひどい処ところだよ。どうも六百からの棄権きけんで
すからな。」

なんて云っている人もあり一方ではそろそろ大切な用談ようだんがは
じまりかけました。

「ええと、失礼しつれいですが山男さん、あなたはおいくつでいらつし

やいますか。」

「二十九です。」

「お若いわかですな。やはり一年は三百六十五日ですか。」

「一年は三百六十五日のときも三百六十六日のときもあります。」

「あなたはふだんどんなものをおあがりになりますか。」

「さよう。栗くりの実みやわらびや野菜やさいです。」

「野菜はあなたがおつくりになるのですか。」

「お日さまがおつくりになるのです。」

「どんなものですか。」

「さよう。みず、ほうな、しどけ、うど、そのほか、しめじ、きんたけなどです。」

「今年はどうの出来がどうですか。」

「なかなかいいようですが、少しかおりが不足ふそくですな。」

「雨の関かん係けいでしようかな。」

「そうです。しかしどうしてもアスパラガスには叶かないませんな。」

「へえ」

「アスパラガスやちしやのようなものが山野に自生するようにならないと産さん業ぎようもほんとうではありませんな。」

「へえ。ずいぶんなご卓たっけん見けんです。しかしあなたは紫紺しこんのことはよくごぞんじでしょうな。」

みんなはしいんとなりました。これが今夜の眼がん目もくだったので。山男やまおとこはお酒さけをかぶりかぶりと呑のんで云いいました。

「しこん、しこんと。はてな聞いたようなことだがどうもよくわかりません。やはり知らないのですな。」みんなはがっかりしてしまいました。なんだ、紫紺のことも知らない山男など一向用はないこんなやつに酒を呑ませたりしてつまらないことをした。もうあとはおれたちの懇親会だ、と云うつもりでめいめい勝手にのんで勝手にたべました。ところが山男にはそれが大へんうれしかったようでした。しきりにかぶりかぶりとお酒をのみました。お魚が出ると丸ごとけろりとたべました。野菜が出ると手をふところに入れたまま舌だけ出してべろりとなめてしまいます。

そして眼をまつかにして「へろれつて、へろれつて、けろれつて、へろれつて。」なんて途方もない声で咆えはじめました。さ

あみんなはだんだん気味悪くなりました。おまけに給仕がテールののはじの方で新らしいお酒の瓶を抜いたときなどは山男は手を長くなぐのばして横から取ってしまつてラツパ呑みをはじめましたのでぶるぶるふるえ出した人もありました。そこで研究会の会長さんは元来おさむらいでしたから考えました。（これはどうもいかん。けしからん。こうみだれてしまつては仕方がない。一つひきしめてやろう。）くだもの出たのを合図に会長さんは立ちあがりました。けれども会長さんももうへろへろ酔つていたのです。

「ええ一寸一言ご挨拶申しあげます。今晚はお客様にはよくおいで下さいました。どうかおゆるりとおくつろぎ下さい。

さて現^{げん}今^{こん}世^せ界^{かい}の大^{たい}勢^{せい}を見るに実^{じつ}にどうもこんらんしている。ひとのものを横^{よこ}合^{あい}からとるようなことが多い。実にふんがいたえない。まだ世界は野^や蛮^{ばん}からぬけない。けしからん。くそつ。ちよつ。」

会長さんはまっかになつてどなりました。みんなはびつくりしてぱくぱく会長さんの袖^{そで}を引つぱつて無理^{むり}に座^{すわ}らせました。

すると山男は面^{めん}倒^{とう}臭^{くさ}そうにふところから手を出して立ちあがりました。「ええ一寸^{ちよつと}一言^{いちごん}ご挨拶^{あいさつ}を申し上げます。今^{こん}晩^{ばん}はあ

つにおもてなしにあずかりまして千^{せん}万^{ばん}かたじけなく思います。どういふわけでこんなおもてなしにあずかるのか先^{せん}刻^{こく}からしきりに考えているのです。やはりどうもその先^{さき}頃^{ころ}おたずねにあず

かつた紫紺しこんについてのようであります。そうしてみると私も本気で考え出さなければなりません。そう思つて一いっし生懸命しょうけんめい思い出しました。ところが私は子供こどものとき母が乳ちちがなくて濁り酒にござけで育ててもらつたためにひどいアルコール中ちゆうどく毒どくなのであります。お酒を呑のまない物ものを忘わすれるので丁度ちやうどみなさまの反対はんたいであります。そのためについビールも一本失礼しつれいいたしました。そしてそのお蔭かげでやつとおもいできました。あれは現げん今こん西根山にしねやまにはたくさんございます。私のおやじなどはしじゅうあれを掘ほつて町へ来て売つてお酒さけにかえたというはなしであります。おやじがどうもちかごろ紫紺しこんも買う人はなし困こまつたと云いつてこぼしているのも聞いたことがあります。それからあれを染そめるには何でも黒いし

めった土をつかうというはなしもぼんやりおぼえています。紫紺についてわたくしの知っているのはこれだけあります。それで何かのご参考さんこうになればまことにしあわせです。さて考えてみますとありがたいはなしでございます。私のおやじは紫紺の根を掘って来てお酒ととりかえました。が私は紫紺のはなしを一寸ちよつとすればこんなよに酔うくらいまでお酒が呑めるのです。

「そらこんなに酔うくらいです。」

山男は赤くなつた顔を一つ右手でしごいて席せきへ座すわりました。

みんなはざわざわしました。工芸こうげい学校の先生は「黒いしめつた土を使うこと」と手帳てちようへ書いてポケットにしまいました。

そこでみんなは青いりんごの皮かわをむきはじめました。山男もむ

いてたべました。そして実をすつかりたべてからこんどはかまどをぱくりとたべました。それからちよつとそばをたべるような風にして皮もたべました。工芸学校の先生はちらつとそれを見ましたが知らないふりをしておりました。

さてだんだん夜も更けましたので会長さんが立つて、

「やあこれで解散だ。諸君めでたしめでたし。ワツハツハ。」とやって会は終りました。

そこで山男は顔をまっかにして肩をゆすつて一度にはしごだんを四つくらいずつ飛んで玄関へ降りて行きました。

みんなが見送ろうとあとをついて玄関まで行ったときは山男はもう居ませんでした。

丁度ちようど七つの森の一番はじめの森に片脚かたあしをかけたところだったのです。

さて紫紺染しこんぞめが東京大博覧会だいはくらんかいで二等賞にとうしょうをとるまでにはこんな苦心くしんもあつたというだけのおはなしであります。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年7月5日～

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

紫紺染について

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>